

多職種ミーティングにおける懸念導入表現「気になる/するのは」の多角的分析

高梨 克也

科学技術振興機構さきがけ/京都大学学術情報メディアセンター

takanasi@ar.media.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

本研究の長期的な目的は、言語分析を経営学や社会学などにおける組織論研究のための手法として利用する方法を確立することである。そのための事例研究として、本稿では、展示制作のために継続的に開催された多職種ミーティングにおける「気になる/する」という表現の用例を対象として、この表現を統語論や意味論、構文論といった言語学的観点からだけでなく、談話分析や会話分析、社会言語学などの観点も含めて多角的に分析することによって、この表現の持つ組織論的な役割を明らかにすることを旨とする。

2. データ

日本科学未来館常設展示「アナグラのうた～消えた博士と残された装置」の制作過程において、センサー、コンテンツ制作、空間デザインなど、職能や利害関係の異なるサブグループ間での調整を行う目的で、展示完成までの約7ヶ月間、毎週開催された「ラウンドテーブルRT」と呼ばれるミーティングの全29回分を対象とする(高梨2011b)。出席者は平均10名程度、時間は平均約2時間程度である。これらのミーティングの書き起こしデータを分析対象とすると共に、必要に応じて適宜ビデオも参照した。今回分析対象としたのは、発言者が用いた「気になる/気にする」という表現で、242回の生起が見られた。

3. 統語論

本稿の分析では、「気になる」「気にする」をそれぞれ複合的な1つの述語として扱う。242個の用例を「なる」「する」、肯定/否定、現在/過去、原形/テイル形に分類すると[表1]のようになる。肯定では「なる」系の方が「する」系よりも圧倒的に多いのに対して、否定ではこれが逆転するが、否定の「する」の比較的多くは「気にしなくてよい」「気にしないでください」といった否定形の依頼などである(表中「義務・必要」)。

[表1] 述部「気になる/する」の内部形式

	なる系		する系		計
肯定	なる	71	する	9	
	なった	26	した	2	
	なっている	53	している	22	
	なっていた	9	していた	6	
	なってくる	3			
計		162		39	201
否定	なる	16	する	10	
	なった	1	した	1	
			している	2	
			していた	1	
			義務・必要	10	
計		17		24	41

次に、肯定のみについて、形態ごとの度数を話者別に示す[表2]。肯定の中では、「なる」「なっている」「なった」「している」がこの順に度数が多い。他の形態とは異なり、特に「なった」については、他の参加者の直前の発言の中に「気になる」こと(のきっかけ)が含まれていることが多かった。

話者別に見ると、どのメンバーも、「気になる/する」という表現を概ね発言量に比例する形で対等に使用しており、これらの表現は全体としてみれば、特に個人的な口癖のようなものではないといえる。より細かく、形態別に見ると、各参加者ごとに特徴的な表現がある程度存在することが分かるが(太字)、赤木の「気にしている」を除けば(第9節参照)、ある形態が特定の個人に特有のものであるとはいえない。

次に、格構成の観点からいうと、それぞれ、「対象物(や事象・事態)ガ+気になる」と「対象物ヲ+気にする」が基本形であるといえる。「気にする」の特徴としては、他動詞的な項構造となり、対象物がヲ格で表示されるようになるため、ガ格として主体を取ることができるようになるという点が重要である。つまり、「気になる」ではなく「気にする」を選択する要因の一つは経験主の存在が含意されることにあるのではないかと考え

[表2] 形態毎の発言者別度数 (肯定のみ)

	なる	なっている	なった	している	する	なっていた	していた	なってくる	した	計
笹島	16	25	10	5		3				59
山田	21	6	3	1	4	1	5	3		44
赤木	13	5	1	12	1					32
向井	5	5	2	1	2	1				16
平泉	5	2	5	1	1	2				16
山内	2	7	1			1			1	12
他10名	9	3	4	2	2	1	1			22
計	71	53	26	22	10	9	6	3	1	201

られる¹。この点については第9節で改めて論ずる。

なお、「気になる/する」の主体（経験主）を、明示化されていない場合も含めて特定し、人称ごとに整理すると、1人称が187例と、2人称（18例）や3人称（37例）に比べて圧倒的に多く、この表現の多くは発言者自身にとっての評価を述べるものとして用いられているといえる。

4. 意味論

直感的には、同じ事態 X を評価するのに、「気になる」ではなく「問題だ」と形容することができることも多いと思われる。しかし、同じコーパスにおける「問題」の用例 440 例のうち、実際には、「問題ない」といった否定形の用例が 181 例と 41% を占めていることが分かる。この点は「気になる/する」では肯定（201例）の方が否定（41例）よりも圧倒的に多いこととは対照的である（表1）。

このことから、ミーティングにおいて、問題を指摘する際に、「問題」という表現自体を用いることはある程度避けられる傾向にあるのではないかと考えられる。その理由としては、「問題だ」や「気になる/する」はどちらも何らかの問題の存在を示唆する評価的な表現である一方で、「問題だ」は客観的な判断を言明したものと解釈されやすいのに対して、「気になる」はこれを経験主にとっての主観的な判断として問題にする表現であるため、発言者自身の立場の個性や限定性に配慮した表現と解釈されるためなのではないかと考えられる。こうした「気になる/する」による評価の立場限定性については、第9章で改めて議論する。

5. 構文論

述語としての「気になる/する」が直後にどのような節末形式を伴っているかを表3に示す。際立って特徴的なのは、「気になるのはXだ」「気にしているのはXだ」のように、「気になる/する+形式名詞「の/こと」+格助詞が or 主題ハ」が主格・主題として用いられる疑似分裂文の形式であり、文末形よりも多い。さらに、こうした疑似分裂文の場合、Xは単独の名詞であることは少なく、「気になるのは<文>ということだ」のような節の形式であることが多い。

[表3] 述語「気になる/する」の節末形式

疑似分裂文（「のは」「のが」など）	72	29.8%
文末（「と」「という」含む）	63	26.0%
テ節・デ節・連用節	33	13.6%
ガ節・ケト節	17	7.0%
カラ節・ノデ節	17	7.0%
連体節	15	6.2%
タラ節・テモ節・ト節・ナラ節・レバ節	7	2.9%
引用節	6	2.5%
その他	12	5.0%
計	242	

次に、述語「気になる/する」の被支配項となる主題や格要素については、単純な名詞・代名詞が主題や格要素となっているものは必ずしも多くなく、むしろ「<平叙文>のが気になる」

¹ 「含意する」といったのは、「気になる/気にする」の主題や格要素（主に格とゼロ格）として「主体」要素が陽に表現されているのは35例（全体の約14%）にすぎないためである。

や「<疑問文>かが気になる」のように、埋め込み文を名詞化したものを（主にヲ格として）とっている用例が49例と多く見られた[表4]。

[表4] 述語「気になる/する」の被支配項

名詞・代名詞+ガ格	36
名詞・代名詞+主題ハ・モ・テ	32
名詞・代名詞+ゼロ格	18
名詞・代名詞+ヲ格	15
形式名詞（の、ことなど）・間接疑問節	49

これらの「気になるのは<文>だ」や「<文>のかが気になる」に共通するのは、評価表現「気になる/する」の評価対象は命題で表現されるような事態であることが多いという点である。逆に、「気になるのは<文>だ」と「<文>のかが気になる」とでは、評価表現と評価対象事態のどちらが主題でどちらが題述になるかという機能言語学的な役割が逆転しており、「気になるのは<文>だ」は、評価の対象となる事態を情報構造上の焦点である題術部分に置くための構文であることが分かる。

6. 談話分析

前節で述べたように、「気になるのはXだ」のような疑似分裂文の場合、Xは単独の名詞であることは少なく、命題を表す節などの形式であることが多いが、さらに、より意味論的に見ると、Xのスコープは当該文末までとは限らず、さらに後続する複数の節や文が含まれることも多く、このスコープの末尾を明確に規定するのが難しい例も多い。次の例では、「気になる」で開始された発言が最終的に確認質問の形式で終了しているが、「気になる」内容がどこまでであるかを限定するのは難しい。

(1) [第3回_20110223]

山内：あと、もう1点気になってるの（が）、この掘り込みの300確保しないといけない部分をここで終えているのが、
 笹島：ええ。
 山内：意匠的にどうかなっていうのもあって、
 笹島：うんうん、うんうん。
 山内：このまま、こう壁は、ぬ、ぬるっと全部こっちまでつながらてるよ、っていう方がいいのかもしれないと思っていて、その場合はもっと、ここをひき、引かなきゃいけないってことですかね。

こうした疑似分裂文における「気になるのは」は「話題導入表現」（高梨他2004、丸山他2006、高梨2011a）の典型的形態である。また、特に「気になる/する」という表現の意味を考慮するならば、これは「関心 concern マーカー」（高梨・平本2012）の一種でもある。そこで、これらの特徴を考慮し、本稿ではこの「気になる/するのはが」という形式を「懸念導入表現」と呼ぶことにする²。談話機能的には、これは発言者の「懸念事項」をグループ（の少なくとも一部のメンバー）にとって「議論すべき課題」として会話の場に導入する役割を果たすものである³。

² 関係者の「懸念事項」と議論の構造を抽出するという目的は白松他（2012）の「コンサーン・アセスメント」とも共通する。一方で、主な相違点としては、白松他（2012）では「コミュニティ」レベル、本稿では互いに面識のある「グループ」レベルの問題が対象となっている点や、これに対応して、本稿ではWebデータではなく、対面ミーティングデータの分析が中心となるといった点であると考えられる。

³ 一旦導入された問題が後続の会話の中でどのような方法で参照されているかについては、平本・高梨（2013）参照。

7. 会話分析

話題導入表現自体は『日本語話し言葉コーパス CSJ』のような独話でも多く観察される現象であるため、この発話と他の参加者の発話との関係を考察するよりも前に、この発言者自身の発言の内部構造を分析する必要がある。

まず、「懸念導入表現」が生じやすいターン内の位置の一つはターン冒頭である。ターン冒頭での懸念導入表現には、直前の話題と関連しつつも若干異なる議題を新たに開始するものや（上記(1)など）、直前の話者の発言に対する異議や疑念などを開始するもの（下記(4)など）などが見られた。

次に、ターン冒頭でない場合も含め、懸念導入表現は、気になる事態についての「描写」やなぜ気になるかの「理由」、解決に向けた「質問」や「要望」などのターン構成単位を含む「複数単位ターン」(Schegloff, 1996) が用いられることを投射することが多い。次例では、気になる事態についての「描写」として、展示完成後に生じるかもしれない望ましくない事態が想像に基づいて述べられている (Takanashi & Hiramoto, 2012; Hiramoto & Takanashi, 2012)。

(2) [第 6 回 20110325]

赤木：あの、ちょっと気になるのは、迷子センターの、ここにこう後ろに人が並ぶようになってちやうのかになって、ちょっと思ってたして、そうすると、なんか、この、この入口のあたり付近、こう、なんかここにやたら人が固まりやすいのかになって、ちょっとこれは見えてしまうんですけど。

また、次例では、懸念の表明に続いて、この懸念の「理由」や懸念を解決するための「要望」が、一つの発言の中で継続して表明されている。

(3) [第 16 回 20110603]

笹島：【懸念の表明】 その、8月20日のところで一つ、もう一つ気になってるのが、ま、さっき言った定例の・・・友の会の2回目って、7月下旬、ま、30なのか、その辺にやったとき、ま、その1回目に挙がってきたテストの内容と、2回目の友の会で、その、運営側から挙がってきた、ちょっと、内容を、2週間どこまで網羅できるかっていうのも、ちょっとあるのは、確かかなと思ってまして。

【理由】 ちょっとその、前倒ししているのが、ま、その、数日ってのが、ちょっとこう、感覚的に個人差が出るところだとは思いますが、ま、2日3日って話なのか、1週間って言われると、たぶんちょっとみんなが、1週間ちょっと厳しくてことになるかなと思います、ので、ま、その、友の会のテストプレースの1回目の内容で、どれぐらいのものが、こう、どういうふうに出てきて、さらに運営の方で見ていったときに、こういうの直してほしいって出た中を考えると、

【要望】 やっぱりなんか2週間は必ずちょっとほしいかなと、テスト終わってから。

で、さらにその辺の絞り込みってなると、ま、最大早くしても2日とかそんなレベルかなってイメージが。

山田：そう、そこはそんな感じで。

笹島：ちょっとその、オープン日の設定っていうのは、やっぱりちょっとそろそろ具体化した、おきたいなど。

山田：はい。

このように、懸念の表明が事態の単なる描写に留まるのではなく、「要望」や「質問」と密接に連動したものであるならば、こうした懸念表明者の発言に対して、他の参加者は「なぜ気

なるかの理由」への共感⁴や「解決に向けた質問や要望」への回答などの応答を通じて、提起された問題への配慮を示すことが必要になるであろう。次例では、ターン冒頭で直前の相手の発言に対する懸念が示され、これに対して、このターンを途中で遮る形で、この懸念を払拭する回答が得られている⁵。

(4) [第 5 回 20110311]

有沢：気になってるのが、その、20分ぐらいで、ほんとはこう、退出していただいて、ローステーションという世界なんですけど、ロストしたりとか、いろいろすると、誰にどう指示を出すか非常に難しくなるので、それがまた20分が25分、どんどん悪い方向に、

山田：あ、ただ、その、30人って言うてるのは、うん、運転してる状態で30人というよりは、あの、そのときだけちょっと、特別に5人連れのゲストが来ちゃったとか、コントロールしてる状態なんで。

有沢：あ、そういう、じゃあ、基本的には20人。

山田：うん、そうですね、そうです。はい。

8. 社会言語学

「懸念導入表現」としての「気になる/するのはが」は、発言者にとっての「懸念事項」を表明し、これをグループにとって「議論すべき課題」として会話の場に導入する役割を果たしており、ミーティングの他の参加者もこれに対する積極的な配慮と応答を示すのが一般的である。合意形成会話などに見られるこうしたやり取りについては、片桐ら(2012)でも「配慮要因の提示と擦り合わせ」という観点からの分析がなされている。

ある参加者の懸念事項に対して、立場の異なる他の参加者からの配慮が示されるという点は、特に「懸念導入表現」が2人称で用いられている例において明らかである。次例では、赤木が自身の立場からの懸念事項を述べているが、実はこの懸念事項は展示制作を共同で行っている他のサブグループのメンバー（向井ら）が困るのではないかという、いわば他者の懸念に先回りしたものともなっている。

(5) [第 20 回 20110701]

赤木：うち、うちが気にしてるのは、えーと、とにかく、この3、4、5に、向井さんたちが作業やったときに、結局、ないところで何か起きちゃうと、結局、えーと、それが問題なのか正常なふるまいなのかっていう切り分けに、翻弄されちゃうでしょう、っていう思いがあるんですよ。

向井：うん。まあ、なりますよね。

田口：3、4、5が〇〇さん(赤木らの社名)がお休みだから。

⁴ 高梨他(2008)における「提案セグメント」でも、提案を行う複数単位ターンの中の下位要素として「望ましくない事態の描写」が含まれている例が見られたが、参加者間の合意形成に基づいて新規ビジネスの提案を行うという会話タスクの場合には、この複数単位ターンの焦点は「提案本体」にあり、また「望ましくない」も発言者にとってというよりは一般ユーザにとってであると考えられたのに対して、本稿のような展示制作ミーティングなどでは、「望ましくない」の経験者は多くの場合に発言者自身であり、焦点となるのも他の参加者への「要望」や「質問」であるという点が異なっている。このことと関連して、今回のデータでは必ずしも明示的に述べられてはいない「要望」や「質問」に対しても、この発言者に配慮した他の参加者からの応答が得られることが多くなっている。なお、発言者の「要求」が必ずしも明示されていない場合に、「ネガティブな事実認識」などの記述を「暗黙的要求」と捉えなおす必要があるという点は、自由記述アンケートなどにも共通する特徴である(大塚他 2007)。

⁵ ただし、聞き手が話し手の懸念事項への配慮を示す応答を行った場合にも、問題がその場ですぐに議論されるかや、この議論の中で解決に至るかについては、当然のことながら、さまざまな場合がある。

赤木：うん。うち、うちがないから、特に。
 向井：あ、そうか。
 赤木：うん。で、それを、うちはすごく気にしてるんですよ。ま、で、それでね、向井さんが、その3, 4, 5, あの、変な言い方ですけど、どういう使い方したいですかっていうのが聞けると、もう少しこう、何かあるかなとは、ちょっと思ってるんですけど。
 われわれ、ちょっとそこを気にしています。
 向井：そうですか。
 赤木：はい。
 向井：えっと、ありがとうございます。
 えっと、その、そのとおりで、なんで、いいと思います。

次例でも、笹島は赤木の抱くであろう懸念に先回りして、これを確認質問の形で言語化している。

(6) [第2回_20110218]

笹島：だから、一番気になるのは、こういう脚ですよ。
 赤木：そうですね、脚ですね。うん。
 笹島：脚が4本出るんじゃないかと、ほんとは1本で立ってもらえれば、まだいいよっていうイメージ。
 赤木：そうですね、はい。
 笹島：だけど、それは構造上ちょっと、
 赤木：そうですね。うん、あの。
 笹島：で、怖いんですよ。
 赤木：そうですね、倒れやすいですよ。ぼぎっていきそうですよね。
 山田：そうか、そうか、そうか。
 細いものが何本もあるよりは、でっかいものが1個あった方が、
 赤木：はい。まだいい。

ただし、この例で興味深いのは、笹島は単に赤木への配慮を示しているのではなく、この配慮が自分自身の懸念事項である「構造上の強度」という問題と両立させるのが難しいものであることを主張するものとなっている、という点である。

9. 組織論的考察

第3節で述べたように、「気になる」と比較して、「気にする」は経験主の存在を明示ないし含意させやすい表現であると考えられる。また、発言者ごとの使用形態の比較からは、赤木による「気にしている」の使用は特に際立っていると考えられる(表2)。実は赤木による12例の「気にしている」のうちで、経験主が言語的に明示されている7例のすべてで、経験主は「われわれ」や「うち」のような複数形である。第3節で述べた「気になる/する」の経験主の人称について、これが明示されていない場合に、単数と複数のどちらとすべきかの判断が難しいものこうした事情による。

これらの事象の背後にあるのは、各発言者が単なる一個人としてではなく、所属企業などの組織に属する者として発言しているという事実である。この観点からは、第4節で指摘した「気になる/する」と「問題」との表現選択の問題は、単に客観的な言明が「できない」からやむを得ず「気になる/する」が用いられているのではなく、むしろ、「気になる/する」によって、発言者が自身の個人的ないし組織的立場をミーティングの他の参加者から積極的に差別化し、立場ごとの利害関心の対比を顕在化させるために用いられているのではないかと考えられる。従って、懸念導入表現「気になるのは」は、第6節で述べたように、「懸念事項」を単に「議論すべき課題」として導入するというだけでなく、この議論において当該の問題に対する関係者間の利害関心を調整することを持ちかける役割も果たしている

のではないかと考えることができる。このように考えるならば、懸念導入表現が他の参加者からの配慮を引き出したり(第7節)、ある場合には、他者への配慮を自身の懸念事項と対比させたりするといった点についても(第8節)、これが会話一般における社会規範であるという以上に、異なる職能、経験、関心を持った多職種のメンバーによる展示制作ミーティングという場において、各参加者がそれぞれの職能に依拠した「関心」に駆動されて行く組織的な活動という観点から、その重要性がよりよく理解できるようになる。

謝辞

本研究は JST 戦略的創造研究推進事業さきがけ「多人数インタラクシオン理解のための会話分析手法の開発」(代表者:高梨克也)、科研費補助金基盤研究(B)「会話を通じた相互信頼感形成のマルチモーダル分析と共関心モデルの研究」(代表者:片桐恭弘)の一環として行われた。

参考文献

- Hiramoto, T. & Takahashi, K. (2012) Spaces for performance and spaces for interaction: Verbal and non-verbal coordination of two spaces in sharing future images. Proceedings of the Second International Workshop on Multimodality in Multispace Interaction (MiMI2012), 70-81
- 平本毅・高梨克也(2013)「組織活動の中での案件/問題の指示: 展示制作ミーティング場面を事例に」『社会言語学会第31回大会発表論文集』(2013年3月刊行予定)
- 片桐恭弘・石崎雅人・高梨克也・伝康晴・榎本美香・松坂要佐(2012)「保健指導対話を対象とした相互信頼感形成過程の分析」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B103: 89-94
- 丸山岳彦・高梨克也・内元清貴(2006)「節単位情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所報告 124. 255-322
http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/corpus/csj_report/05.pdf
- 大塚裕子・乾孝司・奥村学(2007)『意見分析エンジン—計算言語学と社会学の接点—』コロナ社
- Schegloff, E. A. (1996) Turn organization: One intersection of grammar and interaction. In Ochs, E., Schegloff, E. A. & Thompson, S. A. (eds.), Interaction and Grammar. Cambridge University Press. 52-133.
- 白松俊・大園忠親・新谷虎松(2012)「住民参画 Web プラットフォームにおけるコンサル・アセスメント支援機構」『言語処理学会第18回年次大会発表論文集』1007-1010
- 高梨克也(2011a)『日本語話し言葉コーパス』における話題導入表現の形態統語論的特徴と談話構造の分析『言語処理学会第17回年次大会発表論文集』623-626
- 高梨克也(2011b)「実社会で自然に生起する継続的なミーティング活動のフィールド調査の狙いと工夫」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B101: 55-62
- 高梨克也・榎本美香・伝康晴・片桐恭弘(2008)「多人数合意形成会話における提案セグメントに応じた聞き手応答の変化の分析」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-A802: 39-44
- 高梨克也・平本毅(2012)「参加者による議事録を利用した継続的なミーティング活動記録の構造化」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B103: 81-88
- Takanashi, K & Hiramoto, T. (2012) Designing a future space in real spaces: Transformation of heterogeneous representations of a "not yet existing" object. In Okumura, M. et al. (eds.), New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI-IAI 2011 Workshops, LENLS, JURISIN, ALSIP, MiMI, Takamatsu, Japan, December 1-2, 2011. Revised Selected Papers. 277-290, Springer Verlag
- 高梨克也・内元清貴・丸山岳彦(2004)『日本語話し言葉コーパス』における節単位認定」(CSJ マニュアル)
<http://www.ninjal.ac.jp/products-k/katsudo/seika/corpus/public/manuals/clause.pdf>